

# 聖婚化される『富嶽百景』

——前史と『東京八景』からの照射——

森 晴彦

## はじめに

太宰治の『富嶽百景』<sup>①</sup>（昭一四）が小説として構築された文芸作品であることは前稿で論証したが、本稿では『富嶽百景』の主人公たちの婚姻成立が聖婚と読者に認識されるように仕掛けた『富嶽百景』前後の史実と作品に言及する。

太宰の創作方法は、作品を完成させるために事実であっても取捨選択をし、現実生活を取材源としながらも改変したストーリーとするために、同時代から妄想小説（佐藤春夫）と呼称される事例は前稿で考察した。私小説を装っているが事実の枠組みをリアリティ確保の担保として使用しながら、小説の構築上、事実を改変して話中話を構成するので、その方法を「私小説的装置」と定義し、太宰の小説は、私小説的装置を駆使して執筆している作品であることも事例を挙げて前稿で考証した。

本稿では、『東京八景』の元内妻Hの不自然な愚妻化した書きぶり<sup>②</sup>と、『富嶽百景』前史となるべき出来事が完全に隠蔽されている点を合せ鏡にし、それらが『富嶽百景』の聖婚をさらに増強している点を指摘したい。シャイな小説家の主人公とピュアなお見合い相手<sup>③</sup>が描かれる『富嶽百景』だが、事実の取捨と改変によって意図的に構築された、

巧みに虚構の世界で再構築されたものであるのだが、さらにそれを補強するかのように『富嶽百景』直前の、聖婚とは程遠い婚活を故意に消去し、後発の『東京八景』では聖婚以前を意図的に苦悩の時代として描いているのであるが、それらを指摘し、「富嶽百景の聖婚化」という問題に言及したい。なお、本稿は創作過程論の立場から論究する。Hieros Gamosとしての考察でもないし、テクスト論や作者論にとっても有益ではないことをお断りしておく。

## 『富嶽百景』前史

『富嶽百景』以後、『東京八景』までの主な作品は次のものである。必要があつて天下茶屋滞在の年、『富嶽百景』発表の前年から示す。

○昭和十三年（一九三八）

九月「満願」（「文筆」九月号）

十月「姨捨」（「新潮」三五卷一〇号）

○昭和十四年（一九三九）

二月「I can speak」（「若草」一五卷二号）

二月「富嶽百景」（「文体」二卷二号）

三月「続富嶽百景」（「文体」二卷三号）

同月「黄金風景」（「国民新聞」三月二、三日）

四月「女生徒」（「文学界」六卷四号）

同月「懶惰の歌留多」（「文藝」七卷四号）

五月『愛と美について』（竹村書房）

〔秋風記〕「新樹の言葉」「花燭」「愛と美について」「火の鳥」

六月「葉桜と魔笛」（『若草』一五卷六号）

十一月「皮膚と心」（『文学界』六卷一一号）

○昭和十五年（一九四〇）

一月「美しい兄たち」（『婦人画報』四三二号）

※同年四月『皮膚と心』（竹村書房）収録時に「兄たち」改題

三月「老ハイデルベルヒ」（『婦人画報』四三三三号）

四月「善威を思ふ」（『文芸』八卷四号）

五月「走れメロス」（『新潮』三七年五号）

十一月「きりぎりす」（『新潮』三七年一一号）

一二月「ろまん燈籠」その一（『婦人画報』四四二号、二は一六年一月）

○昭和十六年（一九四一）

一月「清貧譚」（『新潮』三八年一号）

同月「東京八景」（『文学界』八卷一号）

七月『新ハムレット』（文藝春秋社）

一二月「誰」（『知性』四卷二二号）

私は「風景シリーズ<sup>③</sup>」と呼んでいるが、<sup>④</sup>『富嶽百景』の手応えから、国民新聞短編小説コンクール（招待作家）優勝作品の船橋時代の一断片「黄金風景」を経て、『東京八景』に至るのは自然な流れで、『富嶽百景』は「富士山との対峙と克服」の小過去を描くのでわかりやすいが、『東京八景』は構想時点では、「富士山」のポジションに「東京」

が来たもので、「富士山との対峙」が「東京という街との対峙」という意味合いで用いられている。「百」が「八」なのは、東京での生活が天下茶屋とは異なりはるかに長かったが、東京での生活はまだ未完であることと、あれこれあった過去はここで精算し新たな未来がこれから広がる、という思いが「八」を選ばせていると考えられる。<sup>5)</sup>「東京」での小過去を書く、と同時に継続も読者に位置づけたいわけである。「富嶽(富士山)」は一定期間の連続性に照射される主人公だが、「黄金」は連続性よりも小過去を媒介に過去のある一断片を美化したいと考えられる。『道化の華』三部作ほどではないにせよ、連作という意識が「風景」を媒介に多少は働いているのだろう。

これらの「風景」は、実際の風景ではなく、「主人公のいる風景」を点描しようとしており、そこに苦悩し葛藤し格闘する主人公が浮かび上がる仕組みとなっている。当然、弘前から東京に出てきてからの主人公を描く『東京八景』は太宰の実生活として捉えられ、自伝的小説・私小説として読解されてきたが、事実との齟齬が指摘され、テクス理论的に実生活と切り離して読むべきものという流れも形成されてきた。<sup>6)</sup>

他方、この時期の創作手法としては「先行する素材を再構築して作品化する」方法を多用している時である。日記(女生徒)や伝記(女の決闘)・詩、伝承(走れメロス)・古典的名作(新ハムレット、清貧譚)・聖書(誰)など、先行する作品を活用する手法を多用するこの時期、実生活をモデルとして改変して用いていることもそれらと同等にあることで、実生活を私小説的装置として作爲的に用いての執筆は当然前期からあるが、特にこの中期は、日記や歴史・古典と同じように素材として実生活も題材として処理しているのである。その一つが『富嶽百景』であり、『東京八景』なのだ。つまり「虚構化された私」が作品に描かれているのだが、そこには作爲的な事実の隠蔽なり改変がある。創作過程論的には、作品の構想上の取捨選択は作品構築の上で見逃せない具体的事例となるわけだし、自伝風のスタイルを装いつつ事実と異なった主人公像を描く場合の差異が作品の構想を浮かび上がらせる以上、創作過程の途上の問題として言及しておくべきことなのである。

『思ひ出』で、「みよはもう私のものにきまつた」と安心するも小間使いのみよは下男に暴行され他の女中にもそれ

を知られたため主人公が冬休みに帰省すると姿を隠してしまふわけだが、現実のモデル宮越トキは東京への駆け落ちを身分違いから受け入れられず冬休みの帰省前に奉公を辞めたわけだから、H同様、思い通りにならない女性を悪く書くという屈折した表現に転化されている。抱えた問題を処理できない場合に相手に大きな問題があったからこうなったんだ、という被害者の逃避の構図が作用している箇所であるが、ここでは事実隠蔽の事例として『思ひ出』に登場してもらうにとどめ、先に進みたい。

注意すべきは『東京八景』が、『富嶽百景』前史にあたる時代も遡って描いている点である。所謂水上心中事件から『富嶽百景』執筆に至る間も描いているにもかかわらず、該当する鎌漣時代・阿佐ヶ谷婚活場面を全く記さない点は注目に値する。

『東京八景』はこの時期を次のように記す（傍線稿者）。

私たちは、たうとう別れた。Hを此の上ひきとめる勇気が私に無かつた。捨てたと言はれてもよい。人道主義とやらの虚勢で、我慢を装つてみても、その後の日々の醜悪な地獄が明確に見えてゐるやうな気がした。Hは、ひとりで田舎の母親の許へ歸つて行つた。洋画家の消息は、わからなかつた。私は、ひとりアパートに残つて自炊の生活をはじめた。焼酎を飲む事を覚えた。齒がぼろぼろに欠けて来た。私は、いやしい顔になつた。私は、アパートの近くの下宿に移つた。最下等の下宿屋であつた。私は、それが自分に、ふさはしいと思つた。これが、この世のの見をさめと、門辺に立てば月かげや、枯野は走り、松は佇む。私は、下宿の四畳半で、ひとりで酒を飲み、酔つては下宿を出て、下宿の門柱に寄りかかり、そんな出鱈目な歌を、小声で呟いてゐる事が多かつた。二、三の共に離れがたい親友の他には、誰も私を相手にしなかつた。私が世の中から、どんなに見られてゐるのか、少しづつ私にも、わかつて来た。私は無智驕慢の無頼漢、または白痴、または下等狡猾の好色漢、にせ天才の詐欺師、ぜいたく三昧の暮しをして、金につまると狂言自殺をして田舎の親たちを、おどかす。貞淑の妻を、犬か猫のやうに虐待して、たうとう之を追出した。その他、様々の伝説が嘲笑、嫌悪憤怒を以て世人に語られ、私

は全く葬り去られ、廢人の待遇を受けてゐたのである。私は、それに気が付き、下宿から一步も外に出たくなくなつた。酒の無い夜は、塩せんべいを齧りながら探偵小説を読むのが、幽かに楽しかつた。雑誌社からも新聞社からも、原稿の注文は何も無い。また何も書きたくなかつた。書けなかつた。けれども、あの病氣中の借錢に就いては、誰もそれを催促する人は無かつたが、私は夜の夢の中でさへ苦しんだ。私は、もう三十歳になつてゐた。当然この言辭に騙されてはならない。太宰一流のレトリックが溢れているからだ。「主人公の誠実さに気づかぬ社会によつて裏切られ傷つき孤独に耐える姿」に読者の美意識が誘発されると考へる太宰にとつて被害者的わびの美に染められた主人公がここにも現出している。「H」は当時内縁の妻だつた小山初代と想起されるイニシャルであるので読者にそう取らせたいのだろう。本稿でもそう措定して話を進める。

事実との齟齬は、小さな捨象も当然あるが、やはり看過できないのは、小山初代と別れた後の、「一人鎌滝での下宿生活の嘘」と「消された阿佐ヶ谷婚活場面」である。そしてこの二場面は、『富嶽百景』で描かれた場面へと連接することである。この時代を「鎌滝時代」「阿佐ヶ谷婚活場面」と私に呼称するが、『東京八景』で描いたこれらの場面に對して、小説が虚構であることを証明する、現実の太宰を描写していると考へられる作品を對比してみたい。<sup>⑩</sup>まず、この頃親しかつた檀一雄の『小説太宰治』から示しておく。<sup>⑪</sup>

船橋の頃の不健康は、失せてしまつて、太宰は例のユーモラスでチャーミングな快活を取り戻してゐた。もつとも、心の楽屋裏の方は、私は知らない。太宰と私と伊馬と発起して、「青春五月党」といふのを結成した。例のやけ糞からである。私の妹の友人を呼び集めた。女子美術の生徒達である。それから高橋幸雄、堀内剛二、猪口富士男等と呼んできた。女達にめいめい弁当を作らせ、桜が丁度終つた頃、大はしやぎで、石神井の池畔に出掛けていつた。

次に井伏鱒二だ。『亡友』<sup>⑫</sup>で次のように記している。

彼は山に籠る前には萩窪の鎌滝といふ下宿屋にゐたが、いつも二人か三人の食客を泊めてゐた。昼間はその食客

の友人がやつて来て、いつ行つてみても四人五人の客のみなかつたことがない。酒は平野屋といふ酒屋から帳面  
で取寄せてゐた。食事は下宿でつくる客膳といふのを持つて来させ、酒の肴にはタラコだとかウニだとか花ラッ  
キヨウだとか、そんなものを近所の漬物屋から取寄せてゐた。それが毎日のことなので接客費もかさばつて行く。  
太宰が「晩年」を出した翌年のことで、彼の実兄の代理人（中畑さんといふ人）から送る金で都合つけてゐたが、  
とてもそれでは凌げない。下宿へも平野屋へも次第に借金が殖えて行つた。

とあり、先に引用した『東京百景』の場面と同時期ゆえ、『東京八景』の記述が創作であることが明白だ。特に傍線  
部は太宰一流のレトリックというわけだ。ちなみに「高橋幸雄」は『富嶽百景』で訪ねて来る文学上の友人がいたが、  
昭和十三年九月二五日に天下茶屋を訪ね一泊するのはこの高橋である。「年譜」に「この頃、大いに男女交際しようと、  
檀一雄、伊馬鶴平などとともに発起し、「青春五月党」と称する友誼団体を作つた」として続けて女子美生と石神井  
池畔に遊ぶのを五月九日とする。六月二一日杉並区天沼一丁目二三番地の鎌滝方に転宅するが、井伏の『亡友』は  
この鎌滝時代の退廃を記しているのである。鎌滝時代は『亡友』が大変詳しいが、これらを承けて「年譜」は、

やがて、塩月起、緑川貢、長尾良などが入り浸るようになり、独り身の気易さから、再び不規則な頹廢的な生活  
へと傾斜して行き、故郷からの仕送りのほとんどは、取り巻き連の飲食に回されるようになった。津島家からの  
依頼で、実生活上の監督の任に当たつていた北芳四郎と中畑慶吉とは、月に一、二度訪れては、居候達を追い払い、  
その生活状況を長兄文治に報告していたという。

とまとめている。塩月本人も同様のことを記している。井伏が天下茶屋に太宰を召喚し、長編小説執筆に専念させた  
かつたのもこの鎌滝の下宿生活から脱却させるためであつたのは前稿でも考証した通りである。話を鎌滝時代に戻そ  
う。『亡友』はさらに太宰が隠蔽したエピソードを続ける。

北さんと中畑さんは、太宰に妻帯させようと云ひだした。家庭を持たせないと生活が崩れて来て、またパピナー  
ルを注射するおそれがあると警戒し、二人は私のうちに来て、（略）「つきましては、誰か適当だと思はれるやう

な女のひと、ごわせんでせうか」と中畑さんが云つた。(略)嫁さんを郷里以外のところで捜さうとするのだが、私は適当な女性を知らないと答へた。そのころ私の知つてゐる若い女は、カフェーの女給以外には一人もゐなかつた。

「いや、女給さんで結構です」と中畑さんが云つた。北さんも「連れ子さへなければ、誰だつて結構です」と云つた。「女給から捜すのなら、修治君自身で捜せばいいでせう」と私は云つた。「その代りに、カフェー通ひをしなくつちやいけませんね。カフェーに通ふお金を、修治君に充分に提供することですね。チップなんかも、けちけちするわけには行かないですね。(略)その翌日あたりから、太宰君のカフェー通ひがはじまつた。行くさきは新宿T字型街のスタンド酒場である。いつしよに出かける相棒は、そのころ荻窪川南の下宿にゐた塩月君にきまつてゐた。

先に引用した『東京八景』は、「主人公の誠実さに気づかぬ社会によつて裏切られ傷つき孤独に耐える姿」を求道者のごとく描写するが、対照的に、この場面に対応する実際の太宰は、青春五月党をかわりに、取り巻き連中と自堕落な生活を続け、井伏紹介女性との結婚を受諾するも太宰が相手と判るや相手側から一方的に断られ(食客がぶち壊したともある)、井伏や北の合議で結婚相手を見つけるためにカフェー通ひを一箇月ばかり続けたが成果はあがない。『亡友』は次のように記す。

太宰はカフェー通ひをする間も一人か二人の食客をまだ置いてゐた。新宿T字型街に行くのを止すやうになると、食客をつれて阿佐ヶ谷あたりのカフェーに行くやうになつた。そのころ私は阿佐ヶ谷のピノチオといふ小料理屋の主人と懇意にして、しげしげその店を訪ねてゐた。

そんな切羽詰つた俗物的な婚活をしているのである。『東京八景』の、

どうせ、ここまで書いたのだ。全部を、書いて置きたい。けふ迄の生活の全部を、ぶちまけてみたい。あれも、これも。太宰がもつとも好む、そしてお決まりのポーズだが、『東京八景』もまた私小説として読んではいけないのである。

私小説的装置を用いて書かれた、私小説として読者に読ませたい物語なのである。その証拠に鎌滝・阿佐ヶ谷婚活場面を書いていない。

本稿が「阿佐ヶ谷婚活場面」というのは次の『亡友』エピソードである。太宰がカフェー婚活をしていた時期、井伏が行きつけの阿佐ヶ谷のピノチオという小料理屋が舞台である。

或る日、この店でビールを飲んでみると、おかみさんが大型の写真を出して来て私に見せた。おかみさんの長女の写真だが、誰でもいいから、小説家志望または劇作家志望の青年に娘をやりたいと云つた。次女の縁談がまともだったので、長女の方の話を急いでみた。私は太宰のことを対象に考へて、おかみさんに云つた。

「誰でもいいと云ふのは、ほんとに誰でもいいことだね。再縁の人でもいいのだね」  
店の主人も出て来て云つた。

「よろしくお願ひいたします。無論、どなたでも結構です。妙な云ひかたですが、後がつかへてゐるから急ぐんです」  
私は新聞紙をもらつて写真を包み、太宰も結婚が出来るぞと思つた。

——(略)——

五日目に来ると云つてゐたのを太宰は三日目に私のうちに来て、新聞紙の包みを机の上に置き、

「貰ふことにします」

と云つた。手短かに、しかし静かにさう云つた。

今、引用した檀や井伏の箇所は、小説でも現実でも、「天下茶屋逗留↓お見合い↓結婚」という重要な展開の直前に位置する、重大な場面の隠蔽である。『東京八景』のような「苦悩する主人公」と設定している「私」は、小説の定義で太宰治その人であるように配置しているのだから、読者にとって主人公⇨太宰という関係を必須条件のように付与されている以上、この隠蔽は計画的であり、創作過程上、ある方向性を持った削除であると考えられよう。

小説上「求道者」と「俗物」が置換されている、昭和一二年春以降の同時期を、対照的に真逆に描写する目的が見

えつ隠れつするのもまた『東京八景』である。とにもかくにも、聖域富士山を舞台にし、純粋な女性や母娘たちの声援の中、再生していく主人公を描く『富嶽百景』は、朴訥・懸命な主人公と、ピュアな婚約者の聖婚を描いている。だが、その『富嶽百景』の二年前には高級大ぶらや女郎家での遊興費等で払えぬ借金のカタに檀一雄を熱海に置き去りにし、一年前は水上偽装心中<sup>(16)</sup>をし、直前までが今見た鎌滝時代・阿佐ヶ谷婚活場面なのである。先に引用した『東京八景』の描写する世界のように天下茶屋につなぐ場面ならたしかに問題はないが、実生活では青春五月党やカフエー通いや一方的な見合い破談等の、結婚への格好悪いあがきがある、自堕落な、食客たちとの共同生活の中である。しかし、『東京八景』はそこを一切描写していない。事実の隠蔽ともいえるこの処理は、小説構想上、不要だったとは言えない問題箇所である。これはやはり『富嶽百景』の聖婚を成立するためと第一読者である妻美知子への気遣いからではないかと考えざるをえない。

ちなみに美知子は「鈍感な私にも容易な作品とは思はれず、「東京八景」が「文学界」の翌年の正月号に載りましたときも、五月に、実業之日本社から同名の単行本として出ましたときも、私には何だがおそろしいやうで、読むことが出来ませんでした」（井伏鱒二編『太宰治集』上巻、昭二四、新潮社）と（鈍感な謙辞だが）書き記している。

## 愚妻化されるH

「けふ迄の生活の全部を、ぶちまけてみたい。あれも、これも」（東京百景）と言う割に、作為的に筆を割かないものはいくつもある。たとえば、「私は二十五歳になつてゐた。昭和八年である。私は、この時の三月に大学を卒業しなければならなかつた。けれども私は、卒業どころか、てんで試験にさへ出てゐない。故郷の兄たちは、それを知らない」（東京八景）とあるが、既に調査されているように同年二月三日に長兄文治常宿の神田関根屋に呼びつ

けられて叱責されているにもかかわらずそれを消去して「それを知らない」と秘密を作るし、初代と一箇月静岡の静浦村での坂部啓次郎宅隣家での生活（昭和七年八月）も、「それから八年間の創作は全部、三島の思想から教へられた」（老ハイデルベルヒ）とまで書く、「ロマネスク」を書き上げる三島の坂部武郎宅での滞在の一箇月（昭和九年八月）も、『東京八景』で描かれていないのは、指摘する花田俊典氏も言われるように、東京での出来事ではないからという理由はそのとおりなのだが、東京の鎌滝時代を割愛するのは作品の前提として「ぶちまけてみたい。あれも、これも」から矛盾していて変である。そして、碧雲荘とも井伏宅ともいわれているが、水上心中以後の小山初代は叔父吉沢祐に引き取られるまでの間、太宰と近い空間に生活していたはずであるが、これらについての記述もない。また、井伏夫人節代には相当な迷惑をかけているにもかかわらず、夫人は『東京八景』でも顔は出さない。『富嶽百景』でも放屁捏造場面の登山に夫人が同行していたにもかかわらず登場しない。否、天下茶屋にも同宿していたことも割愛しているし、お見合い後の井伏は天下茶屋に戻り翌日夫人と下山するのに『富嶽百景』ではお見合い現場から井伏は東京の自宅に直行することに変えられている。ちよつと先走るが、実生活でも初代のことでも大変世話になった井伏夫人であるのに『富嶽百景』にも『東京八景』にも登場しないのは、初代を含めた過去をよく識る人物であるために割愛しているのではないかと考えざるをえない<sup>19</sup>。

『富嶽百景』の一生懸命な朴訥な主人公と、ピュアな婚約者の邂逅話は聖域富士山を舞台にした聖婚を描くことに成功しているが、この二人の新しい門出は、「それまでの生活を否定し、これからの生活の正当性を樹立しよう」としている『東京八景』の執筆動機が重複している。前章での鎌滝時代・阿佐ヶ谷場面の隠蔽もそのためであるし、井伏夫人の消去もそれだ。そして過去を否定し現在を肯定、というスタンスが顕著なのはなんといつても『東京八景』でのダメを極めるHの描写なのである。

私が東京で生活をはじめたのは、昭和五年の春である。そのころ既に私は、Hといふ女と共同の家を持つてゐた。田舎の長兄から、月々充分の金を送つてもらつてゐたのだが、ばかな二人は、贅沢を戒め合つてゐながらも、

月末には必ず質屋へ一品二品を持運んで行かなければならなかつた。たうとう六年目に、Hとわかれた。

必ず夫婦にしていたたく条件で、私は兄に女を手渡す事にした。手渡す驕慢の弟より、受け取る兄のはうが、數層倍苦しかつたに違ひない。手渡すその前夜、私は、はじめて女を抱いた。兄は、女を連れて、ひとまづ田舎へ歸つた。女は、始終ぼんやりしてゐた。ただいま無事に家に着きました、といふ事務的な堅い口調の手紙が一通来たきりで、その後は、女から、何の便りもなかつた。女は、ひどく安心してしまつてゐるらしかつた。私には、それが不平であつた。こちらが、すべての肉親を仰天させ、母には地獄の苦しみを嘗めさせて迄、戦つてゐるのに、おまへ一人、無智な自信でぐつたりしてゐるのは、みつとも無い事である、と思つた。毎日でも私に手紙を寄こすべきである、と思つた。私を、もつともつと好いてくれてもいい、と思つた。けれども女は、手紙を書きたがらないひとであつた。私は、絶望した。

Hは、自分ひとりの幸福の事しか考へてゐない。おまへだけが、女ぢや無いんだ。おまへは、私の苦しみを知つてくれなかつたから、かういふ報いを受けるのだ。ざまを見る。私には、すべての肉親と離れてしまつた事が一ばん、つらかつた。Hとの事で、母にも、兄にも、叔母にも呆れられてしまつたという自覚が、私の投身の最も直接な一因であつた。女は死んで、私は生きた。死んだひとの事に就いては、以前に何度も書いた。私の生涯の、黒点である。

Hと二人で、雌雄の穴居の一日一日を迎へ送つてゐるのである。Hは快活であつた。一日に二、三度は私を口汚く呶鳴るのだが、あとはけろりとして英語の勉強をはじめるのである。私が時間割を作つてやつて勉強させてゐたのである。あまり覚えなかつたやうである。英語は口オマ字をやつと読めるくらゐになつて、いつのまにか止めてしまつた。手紙は、やはり下手であつた。書きたがらなかつた。私が下書を作つてやつた。あねご気取りが好きなやうであつた。私が警察に連れて行かれても、そんなに取乱すやうな事は無かつた。

私は、Hを信じられなくなつたのである。その夜、たうとう吐き出させた。学生から聞かされた事は、すべて

本当であつた。もつと、ひどかつた。掘り下げて行くと、際限が無いやうな気配さへ感ぜられた。私は途中で止めてしまつた。

無垢のままて救つたとばかり思つてゐたのである。Hの言ふままを、勇者の如く單純に合点してゐたのである。友人達にも、私は、それを誇つて語つてゐた。Hは、このように氣象が強いから、僕の所へ来る迄は、守りとほす事が出来たのだと。目出度いとも、何とも、形容の言葉が無かつた。馬鹿息子である。女とは、どんなものだから知らなかつた。

私は或る洋画家から思ひも設けなかつた意外の相談を受けたのである。ごく親しい友人であつた。私は話を聞いて、窒息しさうになつた。Hが既に哀しい間違ひを、してゐたのである。

ここまで並べられ根本から否定される愚妻Hの描写は、『東京八景』執筆が「現妻美知子への言い訳」と思えるほどの「過去の否定」から成つてゐる。特にHをめぐる記述は、「前の彼女がダメな人でいかに取るに足りないか」の陳列である。故意に「初代を貶めることで得られるもの」を狙つてゐるのではないか、である。これらの表現が生む効果をまとめると次の項目が掲出できる。

- ・ Hは愚鈍な女
- ・ 書こうとしたのは東京に来ての十年間、換言すればHとの同棲生活の歴史
- ・ 問題ある過去の隠蔽と起こした問題の過小評価
- ・ 美知子に対しての取り繕い・気遣い（Hが愚鈍な女に描かれるのはそのため）
- ・ 倦怠期の夫婦のようなHとの生活全否定（Hを選んだことは失敗）
- ・ 裏切られ傷つく主人公Ⅰ（Hによつて実家との関係悪化・義絶）
- ・ 裏切られ傷つく主人公Ⅱ（主人公が最初の男ではなかつたこと）
- ・ 裏切られ傷つく主人公Ⅲ（入院中の姦通でさらに主人公を傷つける）

太宰が目論むように、『東京八景』を私小説として解し、第一の読者と措定できる妻美知子がHを初代と重複して読解したとき、『東京八景』の効果は、現在の妻美知子に、前内妻がいかに愚妻だったか、初代を愚鈍に見せることで、いかにふさわしくなかったかを示すことで美知子を安心させようとしている、もしくはいかに愚鈍な、太宰を理解しない女だったか、を描くことで、美知子の後発性を緩和しようとしていることになる。美知子にジェラシーをもたせないように配慮している。一番大切なのは美知子だから、という言外のメッセージが浮上する。初代を悪く描くことでいかに太宰と不釣合かを強調し、逆に美知子がいかにふさわしいか、を言外に示す。美知子といい、当時としては珍しい高等女学校中退の田辺あつみといい、太宰の周辺にいた高学歴の女性から初代は外れることも了解されようか。当初の太宰の初代啓発からは真逆の行為だ<sup>20</sup>。

自伝的要素が大変強く、そしてなにより地名とともにそこに住んだ主人公と実在する主人公の兄弟・親戚・関係者と起こした事件を記す『東京百景』は、まさに自伝と読者に読ませるよう仕掛けられているわけだが、その世界は太宰ワールドに変形されていることもまた今日気づかれていることであるし、事実との齟齬が作爲的な虚構を現出していることもわかりつつあるわけだが、とすればこのHに対する描写もまた改変した虚構化された初代であることを疑わねばなるまい。もとより悪役を押し付けすぎているところに胡散臭さがあるのは明白であるが、本当にHは描写されるような主人公を無理解の女性だったのかという疑問は、完璧な駄目ぶりで示されれば示されるほど疑問符が増えてゆく。少なくとも他の事項で素直に描いてこないここまでの自伝的作品の作風を想起すれば尚更である。傳馬義澄氏の「太宰に同情するあまり、ことさらに初代を悪役に仕立て上げる愚をわれわれは警戒しなければならぬであろう」という指摘は炯眼である。少なくとも作中に好んで使う「主人公への不幸と社会の無理解、それに誠実に立ち向かっているのに報われない姿」は過剰演出であるのだし、主人公の立場を成立させるための必要な悪役との振り幅が同情を産むだけに、『東京八景』のHは脚色され虚構化されたHなのである。

たしかに太宰入院中の初代の小館善四郎との過失について悪いと思つてはいないのは無知だからであるとは太宰の

発言だけでなく『嫉捨』の影響もあろうし、太宰の死後、回想録的に出された近くにいた人々の小説も少なからず初代像を構成していくが、『嫉捨』や『東京八景』の影響下にある中で過去の追想している点は割り引く必要があるのではないだろうか。ただ、太宰が深く傷ついたのは『東京八景』でも十全に表現されており、ことに初代の相手小館善四郎については手厳しく、

美術館で洋画の展覧会を見た。つまらない画が多かった。私は一枚の画の前に立ちどまつた。やがてSさんも傍へ来られて、その画に、ずつと顔を近づけ、

「あまいね。」と無心に言はれた。

「だめです。」私も、はつきり言つた。

Hの、あの洋画家の画であつた。

と「佐藤春夫」と読者が措定できる「五年前（略）破門のやうになつてゐた」S氏を登場させ、S氏に洋画家の画才のなさを作中で断定する念の入れようである。太宰のナルシズム<sup>24</sup>からせよ、執拗な拘泥があるのは確かである（たとえば後の『人間失格』等）。初代との婚姻は実家から分籍除籍されるも「掌中の玉のように大事にして」いたにもかかわらず、過去の行状・入院中の不貞など根底から覆す出来事に深く傷ついたのはこの画家断罪でもよくわかる。

昭和六年二月から一二年三月までの約六年間に及ぶ同棲生活について、初代は、

そのころのばんちゃん（稿者注・初代のこと）は非常に勉強していました。私が思いますには、ばんちゃんはばんちゃんなりに立派な奥さんになりましたかっただと思ひます。英語やお茶を習ひに行つたりいじらしいほどにとめていました。私の家に次の女の子が生れた時、健坊（稿者注・多摩の子）はしばしばばんちゃんに抱かれて寝ておねしょをしたりして大騒ぎをしたこともありまし<sup>25</sup>た。

とけなげな努力をしていたという飛島多摩の証言は、初代の現実的な実態ではないだろうか。『東京八景』のHよりもより初代の事実を示しているのではないだろうか。飛島多摩は飛島定城妻で、昭和七年九月に芝区白金三光町の大

島圭介旧宅から同一〇年六月三〇日の船橋転居まで杉並区天沼一丁目の住居で二世帯同居を太宰・初代たちと続けてきた人である。七八ヶ月の初代の東京生活のうち三ヶ月を飛島夫妻と同居しているのである。

英語に関しては『東京八景』にも記述があるし、政治運動の勉強会にも川崎まで参加するなど、太宰に合った人物になるうという努力と素直に評価すべきであろう。とすれば、飛島多摩の証言は、やはり信憑性が高く、美知子との結婚後、いや太宰没後も、太宰周辺の人々は初代に言及した文章を控えているように見えるため、初代の資料も少ないが、『東京八景』は他の脚色や虚構化、割愛も含めて、同様の文芸的処理がHにもなされていると取るのが筋だろう。

また、田辺あつみとの心中にしても、実際の初代は相当ショックであったと考えられる。「東奥日報」（昭五・一一・三〇）のような顔写真入りの新聞報道を全く無視できる環境にはいられない地元の関係者だけに、結婚相手の突然の心中をどう整理すべきかという苦悶があるのは明白である。けして『東京八景』に描かれるHのようなのんきな姿勢ではないと考えられよう。仮に表面的にはそうでも心中は大変複雑である。玉の輿にのるような相手であるだけに、複雑さは重く存在したと考えるべきだ。そこを初代の性格が救いとなったわけである。

ここで想起されるのが、みよ（思ひ出）、あつみ（道化の華、葉、狂言の神その他）の事実改変である。あつみは入水に美化するのでプラスの改変とすれば、マイナスの改変はみよに顕著で、「去った女性を悪く書く」という特徴の代表でもある。

女性ではないが兄たちを擁護する目的の高等小学校進学の弁明（思ひ出）や『虚構の春』の手紙捏造など、あつみとの心中場面を現実と異なってリリックに描いたように、小説上のフィクションは十分に書いた虚構が事実化されることを身をもってここまで体験してきたはずであるし、私小説的装置を駆使用する端緒でもあったはずである。それだけに『東京八景』でのHの処遇を読者がどう受け取るかは百も承知、いやそう先導しているのが太宰自身であることは確認しておかねばならないことである。

花田俊典氏御指摘の「『東京八景』は「思ひ出」とあわせて読めば、彼の自伝小説による幼少期から昭和一五年の

数えどし三二歳の前半までの自画像を、弘前高等学校時代を除いて、およそたどることができるとは、これらの自伝小説はかなり変形されている。太宰治の重心が過去の人生の履歴の記録ではなく、いま現在の文学的モチーフにかけられているからである<sup>(26)</sup>。は詳細な事実と照合からのものだけに首肯すべき指摘であるし、三谷憲正氏が立項した「〈情死の女〉像」と「〈生活の愚妻〉像」もまた特筆すべき二系列で、「理想」とする「〈情死の女〉」と「ののしられる」〈生活の愚妻〉という作品上の二系列は、基本的には本稿でも適応される。ただ、作品世界と現実世界の交錯を措定するために賛同は得られないだろうが、『東京八景』のHは「ののしられる〈過去の愚妻〉」であり、「大切にしたい〈理想の妻〉」は書かれていない作品外に存在する現実の妻美知子であるという変形である。と考えると『東京八景』での変形の度合いが明白になってくる。三谷氏の枠組みを使えばそうなる。三谷氏は、

師走、酷寒の夜半、女はコオトを着たまま、私もマントを脱がずに、入水した。女は、死んだ。告白する。私は世の中でこの人間だけを、この小柄の女性だけを尊敬している。

私は亦、地平線のかなた、久遠の女性を見つめてゐる。(略) ええ、女が帝国ホテルへ遊びに来て(略) 女は、その帝国ホテルのあくる日に死にました。

を掲げ、さらに「火の鳥」(昭一三「天下茶屋」で執筆、未完)において須々木乙彦と高野さちよの情死の場所が「帝国ホテル」であることから、「情死Ⅱ帝国ホテル」という組み合わせを指摘し<sup>(27)</sup>、

銀座裏のバアの女が、私を好いた。好かれる時期が、誰にだつて一度ある。不潔な時期だ。私は、この女を誘つて一緒に鎌倉の海へはいった。

自分は海辺の病院に収容せられ、故郷から親戚の者がひとり駆けつけ、さまざまの始末をしてくれて、さうして、くにの父をはじめ一家中が激怒してゐるから、これつきり生家とは義絶になるかも知れぬ、と自分に申し渡して帰りました。けれども自分は、そんな事より、死んだツネ子が恋しく、めそめそ泣いてばかりゐました。本当に、いままでのひとの中で、あの貧乏くさいツネ子だけを、すきだつたのですから。

(『人間失格』、昭二三)

と情死の前夜泊まるのも「帝国ホテル」ではなく、「本所の大工さんの二階」の部屋に移行し、「理想の女」の役割はすでに終わっている、と指摘する。二系列を措定し、一方が「〈生活の愚妻〉像」とするのは卓説で、『東京八景』のHもそこに位置する。

「理想の女」の設定には「帝国ホテル」が使われ、右の素材である太宰と田辺あつみもまた心中前に帝国ホテルに宿泊とされてきたが、安藤宏氏によって神田の萬世ホテルであったことが実証され、三谷氏は、帝国ホテル一泊一〇円より（昭四・一二）の広告と「萬世ホテル」一泊二円五〇銭（昭六・六）を調べられ、「情死は豪華である必要があった」とする。太宰は『道化の華』はじめ帝国ホテルと記載するが、ホリウッドもあつみのツケであるし、懷事情から帝国ホテルは難しいはずだ。

太宰があつみと情死をはかった際の道具立てとして帝国ホテルが必要だったのは、私淑した芥川龍之介が平松麻素子（妻文の親友で芥川の自殺監視役だったのではとも言われている）を誘って自殺を執行しようと止宿したのが帝国ホテルだからではないだろうか。

ともあれ、美知子との結婚生活の安定は、「私の生涯の、黒点」だった田辺あつみの特別席も、『東京八景』で「不潔な時期」と格下げされ、ついには『人間失格』では「あの貧乏くさいツネ子」（ツネ子はあつみの源氏名）にまで墜してしまいうわけである。これもまた美知子以前の女性たちの愚鈍化なのである。

『富嶽百景』は、大変純朴・純粹な男女の婚姻物語が描かれているが、主人公は世間の無理解から傷ついた過去を示唆し、女性は世俗にとらわれないピュアな人物として設定されている。作品のタイトルが示すように、富士山の様な姿に対する主人公の「思念の変化」を描き、聖域の山で「寛大に主人公を受け入れてくれる先生」と、「純粹な女性たち母娘たち」との触れ合いを通し、主人公の救済と再生を描く小説である。「聖域で、純粹な母子やピュアな人々に接し、様々な富士の姿と対峙して嫌いな富士山を受け容れ、再生していく主人公を描いた物語」なのである。富士を受け入れていくプロセスに主人公の再生を重ねて描くことがこの小説の眼目なのであるが、「純朴なる登場人物た

ち」は、都合よく実在しないため、実在する人物を「改変・脚色・削除・融合」等を用いて人物造形をすることは前稿で考察したが、『富嶽百景』は純粋な女性たちの母性と広く寛容な師事する登場人物・井伏という先輩の父性の下、再生し新たな生活に繋げていく物語であるという説明が妥当な作品であった。前稿でもそういった物語を創るための作務的な事実との齟齬を見てきた。問題は、このあまりにもピュアな男女の出会いと結婚が予兆される——太宰は実際に甲府の見合い相手と結婚するだけに——いわば聖域での、純粋な二人の、聖婚とも呼ぶべき「景」を『富嶽百景』は示しているわけだが、当然、後半部の口述筆記を手伝った美知子もまた自分たちの物語として享受したはずである。そうした執筆環境の中、いくら『富嶽百景』の作中では世俗に無関心な見合い相手として脚色されていても、実際的美知子も無頓着とは思えない（津島美知子『回想の太宰治』からはそうは思えない）だけに、まさに『東京八景』での過去の描写の中には、Hに関する部分については、過去の矮小化と自分の正当化を図っているであろうことが問題として浮上してくる。実際、『東京八景』を書き上げた直後、美知子が合流し、南豆荘に向かい、井伏・亀井勝一郎らと新婚旅行の代替えのような伊豆旅行をしている。こうした事実には語らせたくはないが、美知子に代筆させたり、結婚前に太宰の作品を毛筆で清書する行為を褒めたりしているところから考えれば、美知子が第一読者と定位することもとされるだろう。『東京八景』は、美知子も含めて読まれることを意識しているのは当然であるのだから、Hの愚妻化は前述した理由からである。『人間失格』のツネ子もまた、経年変化で、『東京八景』で「不潔な時期」と特殊なイレギュラーなポジションであった位置づけからしても経年変化の愚鈍化は見取れるのである。それも美知子を第一に考えていなければ、あつみの事件は一位に輝いていたが、すべては現在を起点に考える現在の家庭人となつた太宰にとつて、過去は過小評価し否定するべき汚点として小説上の過去を記述していったと考えるのが妥当である。Hを愚妻に描き、悪い相手に翻弄され、『富嶽百景』での聖婚を成立させるために兼鎌滝時代・阿佐ヶ谷場面をカットし、先に引用した『東京八景』のような傷ついた主人公を配当することで、『富嶽百景』の前史が『東京八景』からの後付けによって完成するのである。

## おわりに

ここまで『富嶽百景』の前史と後にあたる『東京八景』をいささか見てきたように、『東京八景』での過去の描写、特に前内妻日の愚妻ふりは、『東京八景』執筆時点での太宰から過去を裁断して再生しているわけで、それもこれも現在の妻への配慮からと考えられるが、作品として見た場合、世俗を気にしないピュアなお見合い相手と朴訥で一途ゆえに傷ついた主人公の再生と結婚を描く『富嶽百景』は、まさに聖域での出来事でもあり聖婚と呼ぶべきものであるが、純粋な人々のみが登場し、主人公が癒され、救済・再生する物語の前後を、『東京八景』は故意に、世俗的なことを排除して聖婚の『富嶽百景』を成立させるストーリーのみを示しているわけである。問題は解決され、悪い人は去り、主人公を助ける人たちが主人公の周りに集まってくる話である。

もちろん前稿でいささか確認してきたように、『富嶽百景』は私小説ではなく、事実の取捨・改変を用いて構築した小説で、純粋な人々も、ピュアな見合い相手も、主人公を受け入れてくれる母堂も、美談の場面も、事実を改変し、人物を削除し、役割を変え、美談を捏造して創られた虚構であることは前稿で既に考察した。別言すれば、実生活を素材にしているわけである。実際に、安定期といわれる中期は、日記・歴史ものなどの先行するものに依拠する作品が多いが、自分の体験もまた「先行するもの」であり、小説のネタであり材料なのである。従って実生活の体験であっても作中の事例として作品の構想上、取捨したり改変したりして作品にリアリティーをもたらず私小説的装置として使われているのである。

とすれば、『東京八景』は何故に鎌漣時代や阿佐ヶ谷婚活場面やカフェー通いを無視するのか、である。本稿が引用した苦悩のみ前面に押し出されている『東京八景』の場面が水上心中事件と天下茶屋に行く間にあたるわけだが、鎌漣時代や阿佐ヶ谷婚活場面やカフェー通いの時代もまた、ちょうどその同時期であるのは見てきた通りである。何ゆえ鎌漣時代等を捨てて取らないか、だ。『富嶽百景』でも東京のアパートの部屋から見た富士は苦しい（現実への傷心）

としか記されない。Hのことと思われる問題も『富嶽百景』での東京での場面では詳しく描かれない。

ここで気づくことは、『富嶽百景』には純粋な人々のみが登場し、主人公が癒され救済・再生する、というプロットである。そしてそれは甲府を含めた富士山という聖域での物語である。これらが、聖婚を想起させるのに時間はかかるまい。そう、鎌漣時代等を描かないのもそのためである。太宰が「世界で三人尊敬してゐる女性」（昭一・九、井伏鱒二宛書簡）の一人とする、太宰の日常を良く知る井伏夫人節代は、女性であるのだから、『富嶽百景』の作中に登場する条件は満たしながら、まったく存在すら感じさせないほどの消去は、実際のまじい過去を知りすぎている人物のためだからだろう。『東京八景』でもそのスタンスは変わらない。初代を知っていて初代に手厚い井伏夫人は消去なのである。そしてこの執筆動機は、再出発に際しての過去の精算なのだが、過去を過小評価することで新生活を始めている現在の妻美知子に対する配慮が伴走していることも判明してくる。というのも、上京から今日までを総括的に描こうとした『東京八景』でのHの愚妻ぶりは作爲的すぎるからである。同時に、第一読者でもある美知子へのこれからの指針にもなる働きも内包されている。当時の文芸批評や当時の作者が作品を執筆する意識やあり方に鑑みて、今日的なテクスト論の立場で解するように作品を執筆していたわけではないので、ここは今後の美知子への指針にHが反面教師的機能を持たされている作品効果も計算していることも付記せねばならないだろう。

こうした「美化した物語」の公表が再び「新たな太宰像」を作っていくことも計算済みであろう。第一読者が現在の妻美知子であることはともかく、読者に私小説と読ませようとする仕掛けが『東京八景』の作中に仕組まれているからである。この作品によって、聖婚からは程遠いカフエー嫁探しの奔走やピノチオ破談も、自堕落な鎌漣時代も、すべてを消去し浄化する結果となる。『東京八景』の、上京してから今日までの主人公の多くの苦悩と不幸の景、これらを指し示す明るい光となる結婚生活の景——。そこに『富嶽百景』によって純粋な人々との交流と富士山との対峙で救済される主人公の物語が繰り広げられている景を挿入することになる。これによって『富嶽百景』の虚構は事実として読者に受容されて行くのである。前内妻の愚妻化と不都合な事実の隠蔽は、『富嶽百景』の聖婚のみが正

統の物語として受容されていくことを保証しているのである。

## 註

- (1) 『富嶽百景』は「文体」二巻二号（昭一四・二）、「統富嶽百景」が同二巻三号（昭一四・三）に発表された。統編は「ことさらに、月見草を選んだわけは……」から以降である。単行本は、七月刊行の『女生徒』（昭一四、砂子屋書房）に所収。『富嶽百景』（昭一八、新潮社）に採録。
- (2) 拙論『富嶽百景』の創作方法——私小説的装置を駆使した作品世界の構築——（『大正大學研究紀要』九七輯、平二四・三）。
- (3) 中期と呼ばれる多作期は、「日記もの（女生徒）」「典拠もの（新ハムレット、誰）」「風景もの（自身をモデル）」という傾向があると私としては勝手に定義している。「もの」は一応「シリーズ」と呼び変えて呼称しておく。
- (4) これらの「風景」に「まったく自分自身の内面だけを描いているように思うんです」という秋久保泰幸「鼎談 昭和十三年〜二十年の太宰治をどう読むか」（『国文学解釈と鑑賞』五二巻六号、昭六二・六）もあるが、「虚構化された私を描くこと」が目的なのを見落としてはいけないのではないか。なお、太宰が自然景観に無関心であったことは山口浩之氏が「東京八景」発表直後の「貧婪禍」（『京都帝国大学新聞』昭一五・八・五）の「風景などは、問題ではない」や『津軽』や津島美知子『回想の太宰治』などを引き、手際よくまとめている（山口「変貌する『風景』・排除される〈過去〉」、『稿本近代文学』二五集、平一一・二二）。先の鼎談でも東郷克美氏は「太宰は純粋な自然描写はしない人と言ってもいいのではないか」等の指摘もあるが、井伏鱒二も「私は太宰君に煙霞療養といふのを勧め、まだ栗拾ひには早かつたが坂を下つて塔の木といふ一軒屋しかないところへ栗を採りに連れて行つた。太宰君は山川草木には何等の興味も持たない風で、しょんぼりとしてついて来た。ちやうど「富嶽百景」で私のことを云つてゐるやうに、いかにも、つまらなさうであつた」（『御坂峠にゐた頃のこと』、『太宰治全集』三

卷・月報、昭三〇・二二）も自然への無関心を指摘している。

(5) 八景先行説列挙の指摘としては、安藤宏氏（『東京八景』 試論——作品論のために——）「国文学解釈と鑑賞」五二巻六号、昭六二・六）が「日本新八景」（昭二）、「新東京百景」（昭三）七、当初は八景）を題名の背景として指摘する他、花田俊典氏（『太宰治のレクチュール』 平一三、双文社出版、二一七頁）は中国渡来のものであることや「日本八景」（昭三）や藤元みをの「金木八景」を紹介している。

(6) 花田氏註(5)前掲書、松本和也『太宰治の自伝的小説を読みひらく』第一章（平二二、立教大学出版会）等。

(7) 花田氏註(5)前掲書一六〇～一六一頁。

(8) 「東京八景」は昭和一六年一月「文学界」八巻一号に発表。同年五月刊の『東京八景』（実業之日本社）に収録。湯ヶ野の福田屋で昭和一五年七月四日から八日の五日間書き継がれ、一〇日か一一日かに脱稿したと山内祥史氏が推定している（第一〇次筑摩版全集三、平元・二〇、別巻「年譜」平四）。『東京八景』の本文は、第一次『太宰治全集』5〈小説4〉（平一〇、筑摩書房）に拠る。

(9) 花田氏は「信頼」―「誠実」―「裏切り」の「往還」と公式化する（註5、二五四頁）。

(10) なお、井伏も檀も太宰没後すぐや翌年の発表なので、一一～一二年前のことを回想して執筆していることは割り引かねばなるまい。

(11) 檀一雄『小説太宰治』。今、引用は「小説太宰治（続）」（新潮）四六巻八号、昭二四・八）に拠った。

(12) 井伏鱒二「亡友」、「別冊風雪」昭二三・一〇。『井伏鱒二選集』七巻、『井伏鱒二全集』一〇巻（昭四〇、筑摩書房）所収。今、引用は井伏鱒二『太宰治』（平元、筑摩書房）に拠る。

(13) 年譜。本稿では「年譜」と称した場合、特に断らない限り、第一〇次『太宰治全集』別巻「年譜」（山内祥史氏）（平四、筑摩書房）を指す。

(14) 塩月起「昭和一三年一月〔日記〕」に「本家御出入りの呉服屋と洋服屋がそろつて来て、『若様もまた身をかため

ないといけません。誰か意中の人は居られませぬか』『若様、このやうな家においでになりましては、御人格にかかはりません。』とせめたてられたと、大笑ひする。夕刻緑川来る』とある（『太宰治研究』九号、昭四三・六、審美社）。

(15) 註(11)前掲書。

(16) 初代にどれだけの心中の認識があったのかについて、鼻につき始めた初代との別離を考えた太宰側の別れの（儀式）で「太宰の頭の中だけで行われた」心中であることを赤木孝之氏は指摘する（『太宰治 彷徨の文学』、昭六三、洋々社、七六頁）。

(17) 註(5)花田氏前掲書二五四頁。

(18) 註(5)花田氏前掲書二四六―二四七頁。坂部のことは鈴木邦彦『文士たちの伊豆漂泊』（平一〇、静岡新聞社）も参照。

(19) 水上心中から憔悴して戻った初代が哀れで手を取り合つて玄関で節代が泣いたことを相馬正一氏は記しているが（『太宰治と井伏鱒二』昭四七、津軽書房）、その後は井伏家に寄寓し、叔父吉沢祐（祐五郎）宅にいたことも想定されているが、七月中旬、青森へ戻るまでは太宰と会わないようにしつつも井伏宅にいたわけで（井伏節代「太宰さんのこと」『太宰治・坂口安吾の世界』平一〇、柏書房）、これには節代が少なからず関わっていたし、鎌滝の食客が憎らしいと思つていた節代は、美知子と結婚前の太宰の負の部分を井伏より繊細にそしてたくさん識つていた生き証人である。

(20) もっとも東京出奔は企図するも結婚までは考えていなかったとの説や「あれほどの太宰が自分で選んだ女だ」という吉沢祐の説（後出・註(27)）も忘れてはならないが、後出の註(23)の山岸の小説によれば初代への教養の違いを嘆く太宰も多数描写されており、『東京八景』の愚妻ふりと対応しているかに見えるが、太宰の作品が先にありきで回想が形となつていく場合もあり、またそうした初代に関わる恥部を作品に書き残す太宰の創作過程上に働く構成意識を鑑みれば、作品内での記述はフラグ的に目的あるエピソードとして取捨選択されたものと考ええるべ

きであろう。結婚まで進む意外性については、相馬正二氏が示されるように、政治活動という爆弾を抱えた太宰に楔を打ち込む好機で津島家に影響が少ないよう除籍分籍を持ち出したとの見解もあることを付記しておく。

(21) 花田氏註(5)前掲書二〇九頁。

(22) 傳馬義澄「小山初代」(『国文学解釈と鑑賞』七二巻一―号、平一九・一一)。

(23) たとえば檀一雄「小説太宰治」(『新潮』四六巻七・八号、昭二四・七、八)のち『小説太宰治』(昭二四、六興出版社)や山岸外史「初代さんのこと」(『俳句研究』昭二五・一二)のち『人間太宰治』(昭三七、筑摩書房)を交友があつた二人の回想小説として今は掲出しておく。特に山岸のものは初代の姦通についての一般人とのズレを指摘しているが、多分に『嬢捨』『東京八景』の影響による再構築もあるように思われる点は注意したい。

(24) 花田氏註(5)前掲書二四四頁。

(25) 「おどちゃん」と「ばんちゃん」(『太宰治研究』八号、昭四二・六、審美社)。

(26) たとえば吉沢祐の、美知子と再出発した太宰の家を訪れることを遠慮していた理由などもクロスする。「銀座までなかなか行けない、と言つてるのだから、ウイスキーを持って、俺が行けばよかったのだ、初代の叔父だから、俺は今の奥さんに遠慮したんだ。もし俺が行つていたら、それこそ、昔のこと、すべてなつかしく思い出し、太宰さんの心境もどんな風にか変つて、あるいは死なずに済んだかも知れない」(吉沢みつ「太宰文学の下草」『太宰治研究』八号、昭四二・六、審美社。のち同氏『月見草の皿』昭五九、審美社刊所収)などのように以後も初代について語ることを躊躇させるはずである。

(27) 「東奥日報」は「津島県議の令弟」や「津島家から急行」など津島家のボンがメインであるのに対して「東京日日新聞」は帝大生と女給の心中にウエイトを置く見出しである。なお、事件は初代上京の前日にあたり、「豊田のお父さが、頭に濡れ手拭を乗せ、心臓を押え乍ら息を切らして駆けつけ」たことが吉沢祐「太宰治と初代」(小

山清編『太宰治研究』昭三一、筑摩書房）に見える。津島家も蜂の巣をついたような騒ぎとなり、初代も平常ではいられるはずがない。上京も中止せざるをえなかったわけであるし初代の「あんなバカなことを仕出かした奴なんか死んでしまえばいいんだ！」に代表されるように相当の衝撃が想定されよう。

- (28) 学力補強のために明治高等小学校に進むのも旧制弘前中学に進むも学力不振で中退する兄英治・圭治のつてを踏まないためであるが、それを隠すために「からだが弱いからと言ふので、うちの人たちは私を高等小學校に一年間だけ通はせることにした。からだか丈夫になつたら中學へいれてやる、それも兄たちのやうに東京の學校では健康に悪いから、もつと田舎の中學へいれてやる、と父が言つてゐた」（思ひ出）と記すのである。兄たちの東京の私立より田舎の官立の方が学力がいるはずだが、それらを隠蔽し、小學校の後半を皆勤で五六人中一番で小學校を卒えるにも関わらずである。津島家への贖罪も成績には反映される場合も当時としてはあつた中、開校以来の秀才や神童と噂された太宰が、体が弱いを全面に出すのは兄たちの学力問題を隠す典型的なすり替えである。この問題の詳細は相馬正一氏（『評伝太宰治』上巻、平七、津軽書房六〇～六二頁）・花田俊典氏（註(5)前掲書八四・八五頁）を参照。

- (29) 花田氏註(5)前掲書二〇九頁。

- (30) 三谷憲正『『晩年』以降（昭和十年から十二年）に描かれた女性像——〈情死の女〉と〈生活の愚妻〉と』（『国文学解釈と鑑賞』七二巻一一号、平一九・一一）。

- (31) 以下の二作品の引用に際し、稿者が本文を補ったところがある。

- (32) 安藤宏「太宰治の実生活に関する新資料三題」（『太宰治研究』六号、平一一・一八）。

- (33) 註(30)前掲三谷氏論文。